

いたテュルク系部族であるハラジュが、七―八世紀、ヒンドウ・クシユ山脈の北麓に居住していたことが明らかになったのである。本發表では『新唐書』謝颺國傳の「謝颺居吐火羅西南、本曰漕矩吒、或曰漕矩、顯慶時謂訶達羅支、武后改今號」という文章を手がかりに、そこに見える「訶達羅支」と、いわゆる *Nesak Shāh* 貨幣に見える銘 *Nesak* とをハラジュに同定することによって、これらの王國の起源を同部族に求め、併せてこの兩王國成立の経緯をあらためて検討する。

都市とワクフの諸關係

二 浦 徹

九〇年代の都市研究が、畫一的な「イスラム都市論」の解體であるとするれば、近年は個別都市の研究を踏まえたうえで、總合化をめざす動きがみられる。本發表では、イスラム世界の都市空間の形成・發展・衰退といった歴史的變化の原理を、エジプトとシリアの都市を例に議論し、變化を軸に示えることによって、固定的な都市定義にかわるモデルの提示を試みる。

中近世のイスラム都市は、物理的空間としては目的や規模の異なる多様な施設の混在・密集によって特徴づけられるが、基本單位は、方形のブロックであり、その自在な結合によって發展した。宗教施設と維持運営の財源としての經濟施設とを結びつけるワクフ制度は、都市と農村、軍人の支配層とウラマーと市民を連結し、

都市發展の原動力となった。都市の宗教施設や經濟施設の建設數を分析すると、特定の都市や時代への集中が見られ、ワクフという投資を集めうるかどうかは都市の消長に影響していた。

ワクフを利用の平面でみれば、個々人による細分化された利用に依據していた。ワクフが増えるとともに、他方でその收益をめぐる争いが起こり、管理者や吏員によるワクフの私物化によって、施設や都市が荒廢する。都市とワクフの關係を、建設・寄進、運営・利用、衰退の三つの側面から検討し、むずびとして、オスマン統治初期のダマスカスのワクフ調査臺帳から、ワクフをめぐる物と人々のネットワークを再構成する。

歸納と類推

——中國的思考様式を探る——

武 田 時 昌

中國では、注釋學が古くから盛んだったこともあって、具體的な事物からの歸納に力點が置かれ、演繹的な議論を展開することは稀であった。中國科學史文獻においても、代表的な理論書とされる『九章算術』劉徽注や『黃帝內經』においてすら、演繹的な論證はほとんどなされていない。そのために、中國科學の理論的枠組みを構造的に把握するうえで大きな障害になっていることは確かである。それを克服するためには、歸納の方法論における思考様式を明らかにし、その特色を探る必要があるだろう。

そうした方面での研究には、漢代に流行した災異説、天人相關説も大いに注目されるが、陰陽五行説の展開という文脈で考察するだけではおそらく不十分である。自然界と人間社會の間に横たわる關係性を、どのように把握し、定式化しようとしたのかを、自然學との關わりにおいて明らかにすべきであるように思われる。

物類相互の感應關係に着眼し、そこから人間の生き方、社會のあり方を考究しようとする場合には、類推という手法が活用される。それは、陰陽五行説による體系的把握とは異なる方向性があるが、漢代以降の自然探究の理念形成には、大きな作用を發揮した。そこで、『淮南子』『論衡』等に繰り廣げられた論説を具體例として、歸納方式とりわけ類推思考の特色を窺ってみた。

中國戰國時代における正統繼承の「形」

平 勢 隆 郎

正統の繼承について、私はこれまで三つの道筋を論じてきた。

一つ目は、周からの「繼承」である。これがいわゆる「繼承」になる。二つ目が「夏」王朝の復興である。夏→殷→周→夏という循環を考える。この「形」は、王朝の交替による易姓「革命」を、循環をもって説明する。三つ目が下剋上である。これは大夫という下位の者が王や諸侯にとって替わるといいうわゆる「革命」を「形」にしたものである。

一つ目が周王朝、二つ目が夏王朝に關わるが、三つ目は殷王朝

に關わる。田氏の場合、みずから殷の血を引くことを「形」にし、それで下剋上を論じた。だれでも上になれるという論理ではない。

以上の「形」を知って、それぞれの思惑を否定するのもまた「形」になる。たとえば楚は第二の夏王朝の復興と第三の下剋上をそれぞれ否定した。

戰國時代にあつて、「夏」「殷」「周」三代は歴史的存在である。それぞれが問題にされる歴史的領域があり、三つの筋道で正統繼承を語ることは、その歴史的領域の支配の正當性を述べることも關わつた。漢代には、それらの歴史的領域の違いをあいまいにし、各國の主張を混交した。そのため後代の注釋から、戰國時代の領域支配の正當主張をくみとりにくい狀況ができてゐる。

アブル・ファズル自序を読む

近 藤 治

アクバルより八年と三カ月後輩であつたアブル・ファズル（一五五——一六〇二）は、政治顧問の重責を果たすとともに、『アクバル・ナーマ』『アクバル會典』の二大著を残しており、インド史上最大の歴史家と目してよい。彼が『アクバル會典』末尾に附した自序は、司馬遷が『史記』最後に載せた太史公自序を想起させる。司馬遷の自序は自分一家の傳記を述べるとともに、各巻の簡略な内容紹介を兼ねた目次の役割を果たしているのに對し、